

(仮称) 豊田市博物館新築工事設計委託設計者選定プロポーザル総評

●総評

五十嵐太郎

新しい豊田市博物館のプロポーザル・コンペでは、27 者が参加表明した。谷口吉生によるすぐれた美術館として、すでに高い評価を獲得している豊田市美術館に隣接して建つことになる博物館ということで、やはり建築界においてコンペが注目を集めたからだと思われる。5月15日に豊田市役所で行われた一次審査では、審査員がすべての案を確認した後、業務実績や施設づくりに対する提案（知識、技術、創意工夫力、説明表現力、組織力）などの観点から議論と意見交換を行い、投票や採点をしながら、最終的に5者に絞ることになった。提案のレベルは総じて高く、また多様であり、残念ながら落ちることになった案の中にも力作はあったが、特に2次審査に進んだ5者は、いずれも独創性を持ち、博物館に対する意欲的な提案が含まれるものだった。その際、いくつかの案については、提案されている組織の体制が実現可能か、あるいは期間内に竣工することが可能かといった技術的な面からも疑問も出されたが、あらかじめ設計者に事前質問を届けることで、2次審査のプレゼンテーションにおいて回答してもらうことになった。

2次審査のプレゼンテーションは、6月19日にコンペの敷地の隣である豊田市美術館の講堂を用いて、公開で行われた。1者は重要な海外出張のため、主たる設計者がスカイプを通じての説明となったが、いずれも設計チームからのプレゼンテーションと選考委員による質疑応答が順番に繰り返された。その後、美術館の会議室に場所を移して、選考委員による審査会が開催され、討議と採点が行われた。まず、令和5年度中の開館というスケジュールの実現性や、豊田市がめざす新しい博物館像などの条件から、2案は懸念が払拭できず、坂茂建築設計、隈研吾建築都市設計事務所、佐藤 総合計画・塚本建築設計事務所 JV に絞られた。続いて、デザインの面からさらに検討し、坂茂と隈研吾の2者が最終的な候補となった。議論の結果、既存の美術館と並びながら、新しい建築像を提示し、博物館のプログラムにも応えられる前者が、よりふさわしい提案と判断された。

以下に、選考委員のコメントを反映しながら、採点結果が高い提案から、個別講評を記す。

* 坂茂建築設計

20世紀末に建てられた美術館と部分的に同じレベルで博物館を並べながら、木材やソーラーパネルを活用する21世紀の建築の姿を提示するという意欲的な作品である。またピーター・ウォーカーを再起用することで、2つの施設をつなぐというアイデアは、他にはまったくなかった発想として高く評価できる。おそらく、博物館が完成したときに、新しい風景が出現したり、来場者が相互に乗り入れするなど、美術館との相乗効果も期待できるだろう。他の博物館施設とのつながりや防災拠点に関しても、よく考えられた案だった。一方で平面計画はフレキシブルな可変性を持ち、博物館としての機能は、施設側、また学芸員との話し合いを通じて、練りあげていく余地をもっている。

* 隈研吾建築都市設計事務所

博物館を美術館と同じレベルとしないタイプの提案の中で、最もオーソドックスにまともっており、計画にも破綻がなく、堅実かつ安定感のある提案だった。ゆえに、実行性が高いことが評価される。洗練されたデザインも魅力的である。しかしながら、既存の引き出しを巧みに組み合わせたようなところがあり、新しい可能性を生み出す、歴史を刻むような建築には到達していないと思われる。また、まわりの広大なオープンスペースは検討の余地が残っている。

* 佐藤 総合計画・塚本建築設計事務所 JV

はっきりとしたコアを設けており、これも博物館として堅実な提案になっている。ただし、大屋根について、市民の賑わいが調整できるという肯定的な意見があった一方で、その存在、すなわち意匠や台風時の安全性などについて疑問が出された。なお、これも博物館と美術館を同じレベルとしない作品だったが、ランドスケープを活用し、建物の外郭でリング状のスロープによって美術館への通路を設けるデザイン手法は、他の提案になく、秀逸である。

* Studio Velocity

建築としての革新性があり、実現すれば、独特の造形ゆえに、豊田市の新しいランドマークになりうる強烈なインパクトをもっている。また設計事務所の拠点が豊田市に近く、もし案が選ばれたら、頻繁に現場を訪れ、時間をかけて、丁寧にプロジェクトに取り組むことが予想された。しかし、プレゼンテーション後の質疑応答を踏まえると、博物館に対する考え方、ランドスケープ、工期のスケジュールなど、いくつかの点で選考委員の懸念が解消しなかった。

* 石上純也建築設計事務所

博物館側のレベルを持ち上げながらも、展示室や中庭がその下に展開するという空間構成は、全応募案の中できわめてユニークな発想のデザインであり、実験的かつ大胆な提案だった。しかし、プレゼンテーションを通じて、博物館に対する考え方、ランドスケープ、構法、スケジュール、コストの増大など、複数の疑問点が解決されなかった。また平面の可変性という面でも、アイデアの根幹に関わることから、博物館側との調整が難しいと判断された。